

在宅診療見学を終えて

薬剤師会実務実習生 中西美怜（昭和薬科大学）

今日在宅診療見学をさせて頂いて私は在宅の医師、看護師、薬剤師の方々は「病気を診る」ということより「その人を見る」ということを大切にしているということを感じました。

これは決して今の実習先の薬局の薬剤師の方が患者さん処方箋の薬以外を軽視している、もしくはアーバンクリニックの方々は患者さんの病気を診ないという意味ではなく、患者さんのお宅に訪問して診察したりバイタルを取ったり、患者さんや患者さんのご家族とお話をしたりと患者さんとより間近に向き合うことで、診療所や薬局で患者さんと話をするだけでは見ることはできない、もしくは掴み切れないその人の生活空間や生活スタイル、その人の性格や一緒に住んでいるご家族などを診察の時に見ることになるので、在宅診療はより一層その患者さんの核の部分に迫っている医療だということを感じました。

例えば、処方箋の薬の処方量をその人の残薬状況に応じてその場で変更したり、喀痰の有無、あればその出方がスムーズであるかどうかをご家族の方から伺って出方が悪いようであれば抗生物質の注射剤を投与したり、次回以降喀痰の吸引をどうするかをご家族の方も交えて検討するなど、個々の患者さんの状況によって対応が異なっていたことが私の在宅の見学の中にもありました。また、患者さんや家族の方から患者さんの体調を伺う時に、機械的にここ最近の体調はどうですかと聞くのではなく、食事について聞いたり、デイサービスについて聞いたりもしくは趣味について聞いたりするなど一人一人違う話題を投げかけてそこから必要な情報を集めていたことも私が見学している中でも見られました。

私は当初「在宅医療」という言葉を聞いたときメディアの影響もあってか、イコール「終末期医療」と勝手に結び付けて、何か特別なことをしているものだと勝手に解釈していました。しかし実際のところ、基本的には患者さんのお宅に訪問して患者さんの話を聞いて体調や何か生活で変化はないかなどを聞き、ご家族からお話を伺ってと、診療所によくありそうな会話とプラスアルファでよくある診療所の診察風景でした。シンプルなものではありませんでしたが、端から見ると何気なさそうな普通の会話中から実は重要な情報が含まれていたということもあり、それを拾っていくのが在宅医療だということを感じました。無論、会話の中での重要な情報を拾っていくのは病院でも薬局でも重要なことです。もうひとつ在宅で大切なことは患者さんの生の生活空間を見ることができることです。薬局や病院では患者さんの実際の生活を見ることはできませんが、在宅診療では患者さんとの会話では見ることのできない患者さんの姿をその人の生活空間を通してみるすることができます。その中でその人にとって何が必要で何が必要でないかを見極めるのが在宅医療だということだと考えました。

最後になりましたが、お忙しい中このような貴重な経験をさせてくださった桜新町アーバンクリニックの方々に感謝の言葉を申し上げ、閉めさせていただきます。